空の郵便物

悲喜 章輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の郵便物

【Ｎコード】
Ｎ７４０３Ｃ

【作者名】
悲喜　章輔

【あらすじ】
空から降ってきた謎の箱。さらに俺にのしかかる謎の女の子。日常なんてあきた！非日常の幕開けとなる。あぁ俺、これからどうなっちゃうんだろう…

第一話：空の郵便物

学校の帰り道。
俺はいつも通りぼーっとしながら歩いてた。
「あぁ～　退屈」
いや、実はこうしてほざいてる場合でわないのである。
なんたってもうすぐテストだからだ。
なーんて思いながら俺は空を見上げた。
今日はテストが近いということで授業は午前中だけだったのだ。
「のどかだなぁ」
そんなことを呟きながら歩く。
すると晴れ渡る空に何かキラリと光った気がした。
そして歩みを止めてその方向を俺は重視した。さらに空の遠くの方に小さな黒い影が見えた。
思わず息を飲む。
よく見ているとその影はだんだん大きくなるのだった。
まさにそれはこっちに向かって落ちてきているようだ。
俺が口をあんぐりと開けているとすぐそこの地面にごすっと落ちた。

やはりこういうところは人間。
俺はその箱が気になって拾い上げた。
「綺麗な箱だなぁ…」
そう呟いて俺は無意識に箱を開けていた。
すると中がピカリと光り、そしてそれはすぐにおさまった。
「い、今のは…　一体…」
俺は目をパチクリさせ、そう言った。
すると頭上の方から叫び声が聞こえてきた。
男にしちゃ妙に高い声。
つまり…

と、思考廻りしていたところ俺の上に今までにあじわったことのない衝撃がおきた。
「ぐはぁ！」
そう言って俺は地面にうつむせで倒れた。
「あ～　いたたた」
俺の背中に何者かが乗ってそう呟いてる。
ハッと俺は正気に戻り無理矢理身体を起こした。
するとそいつは俺から落ちたようだ。
そして俺は制服に着いた砂を払い落としながら立ち上がった。
そのときだった。
「何すんのよ！」
後ろから声がした。
振り返るとそこにはまさにゴスロリ調子の女の子が立っていた。
そして地面には何故かほうきが…
そして俺は呆れたように言った。
「そりゃこっちの台詞だ！だいたいな、いきなり人の上に落ちてきてなんだとはなんだ！」
ホントにそうである。
これが小説だからいいものの、現実に起きたらきっと二人共命はなかったはずだ。
しかし、そいつはそんな俺の思いすら知らず泣きだした。
「う、う…」
俺はまずいと思って両手を前に出し「わかった！悪かった！」と言った。
するとそいつはすぐに泣き止んだ。
ったく…　なんで謝ってんだか
そんなことを思いながら俺はそいつに聞いた。
「この箱といい、おまえといい、一体なんなんだ？」
しかしそいつはムッとしてこんどは怒り出した。
「あんたね、人の事聞くんだったらまずは自分から！」

そう言ったあとそいつは常識でしょ？と言ってプイッとそっぽを向いた。
俺はしかたなく「ごめんごめん」と言って自己紹介を始めた。

第2話

「俺の名前は川村陽助。頭はそこそこ悪いが人間としてはやっていけてるつもり」
そこまで言い終わって俺は一息つき、また始めた。
「別に特技とかあるわけじゃないしつくろうとも思わない。」
そこまで言い終えるとそいつは聞き飽きたのかいきなり話し出した。
「あんたのことは充分わかったわ。次はわたしね。」
い、いや待ってくれまだ俺の話しは…
まぁ…いいか…
今止めると怒るだろうから…
俺はこくりと頷いた。
「わたしは魔法界からきたのよ。ちなみにあなたにわたしの名前は発音出来ないわ。」
「は！？なんだそりゃ」
「つまり！魔法界では人間界とはまったく違う高等な言語を使ってるのぉ！」
「は、はぁ…」
俺はしぶしぶと頷いた。

沈黙。

しかしそれもすぐに打ち破られた。
「あんた…」
そいつは俺に顔を近ずける。
どうやら俺より背が低いらしく俺を見上げていた。
近い…近い！
俺はちょっと後ずさったが苦笑いしながらもその視線に耐えた。
するとそいつはやっと口を開いた。

「信じてないでしょ」
俺はドキッとした。
いや、する必要はないと思うけど…
でも実際、そんなこと信じれるわけないだろ？
結局俺は「し、信じてる」と言ってしまった。
するとそいつは「まぁいいけど」と言って顔から離れた。
「つまりおまえは魔法使いだってことだろ」
俺は今説明されたことを言い回しをちょっと変えて言った。
するとそいつは「宜しい」と言って俺のほうに歩み寄って来た。
と思ったのもつかの間。
そいつは俺をあっさりスルーし、俺の少しうしろの方で立ち止まった。
「どうしたんだよ」
俺は振り返りながら言った。
しかしそいつは無視しいきなりしゃがんだ。
俺は思わず覗きこんだ。
ゆっくりちかずいていき…
「あぁー！」
そいつがいきなり立ち上がるもんで俺のあごにそいつの頭があたった。
まるでアッパーをくらったかのようにひらりと空中を舞い、地面にたたき付けられた。
涙目になり俺はずきずき痛むあごをさすりながら立ち上がった。
すると俺の前方に嬉しそうに跳ね上がっている奴がいた。
「どうして…」
どうしてお前は平気なんだと言う間もなくそいつは俺に駆け寄ってきた。
「みてみて！飛行石！」
その小さい両手の中に輝く綺麗な石が一つあった。
「その綺麗な石がどうかしたのか？」

俺は喜ぶそいつに質問した。
「魔法石の一種でこれがあるとそこのほうき」
そう言うとそいつは俺の後ろに転がっているほうきを指差した。
俺がそのほうきを見るとまた話し出した。
「それで空をとべるのよ」
「ふーん」
俺がそう答えるとそいつはガクッとなった。
「なによそのリアクションわ！」
「い、いや…」

……

沈黙。

やめてくれ！
俺こういう状況すっごく苦手なんだ！
そんなことを思っているとそいつは鼻をならした。
「…まぁいいわ」
「は、はぁ…」
ああそうですかと言わんばかりに俺はあいづちをうった。
「それでね――――」
強い風が吹いた。
そのせいで聞き取れなかった。
いや、そういうことにしたかった。
俺は恐る恐る聞いた。
「今、なんて？」
俺が聞き終わるとそいつは確かに。
はっきりと。

大きな声で言った。
「あんたの学校とやらに行ってみるわ！」
なななななにをおっしゃるかと思えば！
「お前！マジで入る気か！？」
俺はその現実を吹き飛ばしたかった。
しかし、こう言ってもあいつが聞くはずがない！
「もちろんよ！それとあんたには責任とってもらうからね！」
俺よりちょっと背の小さいそいつはかわいらしいその姿で腰に手をあてた。
「これからはあんたの家に住むことにするわ」
もちろん俺がＯＫするはずがなかった。
「断る」
「わー即答。いいじゃない減るもんじゃないし」
「だーかーらー　これでも俺は健全なる中学生だぞ。つまり…」
するとそいつはまたもや俺の顔を覗いてきた。
「ふ～ん」
そいつはその下から覗き込んだ姿勢のまま言った。
「はずかしいんだ～」
なんだかこういう言い方をされるとムカつく。
俺は込み上げる怒りを押さえながらゆっくり頷いた。
そいつはそっかそっかと言いながら俺の前方に三歩進んだ。
しかし俺は両手を広げた。
「だいたい、なんで俺の責任になるんだよ」
そいつはくるりと俺の方に向き直り応対した。
「あんたが箱を勝手に開けちゃうからよ」
「それがなんだよ」
「つまり、あんたのせいで私が魔法を使えなくなっちゃったの」
全く…と言ってそいつは腰に手をあてた。
が、それはこっちの台詞なのである。
だいたいいきなり箱が落ちてくるのがいけないのだ。

普通、開けたくなるだろ？
「ていうかそれって落とす方が悪いだろ！」
「ふんっ…　とにかく今日からあんたの家に住み着くからよろしくね！」
と、溢れんばかりの笑みで言われた。

第3話

というわけで今、二人で俺の家に向かってるわけだが…
「おまえな…」
「ん？なに？」
呆れるのも無理はない。
だって。

普通にほうきで空中に浮いてるのだから。

俺は右上にあるそいつの顔を見て言った。
「わかった。おまえが魔法使いだということはかなり把握した。だからそのほうきから降りてくれ。」
「いやよ、疲れるじゃない」
「いや…　そういう問題じゃなくて…」
ああ…　どうする？俺！
さっきだってすれちがったおばちゃんと意味ありげな挨拶をかわしたんだ。
あいつを見て驚かない奴はいないだろう。
あ～だめだこんなに人通りが少ない道でもすでに5人ほどすれちがった。
もちろん、みんなビビってた。
ちくしょう。こいつが浮いてたりしなければせめてコスプレ好きのかわいい女の子にしか見えないのに！
ちがーう！そんなことよりはやく降りさせなきゃ。
俺はぶっきらぼうに言った。
「お願いだから！ほんとにマジで頼む！ほうきから降りて歩いてくれ！」
するとさすがにかんねんしたのか、そいつはほうきから降りた。

「わかったわよ！そんなに怒鳴らなくてもいいじゃない。」
そいつはさも不機嫌にした。
そんな奴を俺はまぁまぁとなだめておいた。
「まぁ、許してあげるわ。この世界には魔女なんてほとんどいないからね。」

…こいつ、わかってやがったのか。
ちくしょー！なんかムカつくぞ！

俺は募る怒りを抑えながら歩いた。

第４話

不覚だ。まったくもって不覚だ。
だいたい、こんなことがあっていいのだろうか…
現在、食卓には俺、妹、母さん、父さん…
そして、奴！
まぁ、いわゆる夕飯なわけだが…
どうして奴がいるのかというと。

午前１１時。
そこで事態は起こった。
俺と奴が家に着いた時間である。
自宅の扉を開けようと手を延ばしたとき、俺は動きを止めた。
ふと、思ったのだ。
こいつを家に連れ込んだらいったいどうなる？と。
無論、母が家にいる。
つまりだ、勘違いされてもしかたがないわけなのだ。
困る。非常に困る。
こいつが俺の彼女だと思われるのは非常に困る。
「どうしたの？はやくしてよ！」
奴は駄々をこねる。
俺はそいつを無視し思考を廻らせる。
俺の部屋はこの扉を開けてすぐ近くの階段を上がって短い廊下を一番奥まで進んだところだ。
そこまで気付かれずにいければ…
「よし」
俺は決断した。
「靴を脱いで手に持ってくれ」
俺は奴に言う。

奴は怒るかと思ったがそんなことはなく言う通りにした。
「それで家に入ったら俺の部屋まで突っ走るぞ」
なぜか真剣もーど。
「わかったわ」
ふぅ。俺は軽く一息つく。
「行くぞ」
「うん」
そして俺はドアノブに手を当てた。
ゆえに勢いよく開けるのであった。
しかし、俺は愕然とした。
扉を開き、まさに一瞬で俺のたくらみはどこか遠くのほうに葬られたのだ。なぜなら…
扉を開けたその先には母親がいたからだ。
「か、かあさん！？」
その瞬間、俺はひっきりなしに叫んでいた。

第5話

というわけで今のこの状況にいたっている訳なのだ。
「人の家だとも思わずガツガツ食いやがって…」
俺は小声でいったがやつには聞こえていたようだ。
「…何よ文句でもある？」
かなりムカツクのである。
非常である。不当である。
理不尽である。不純利である。
不本意である……
俺の頭の中はそんな言葉達でパラダイスであった。
「まぁまぁ、いいじゃない…」
睨み合う奴と俺に弱々しく止めに入る母さんだが。
むしろこんなやつと喧嘩するほうが面倒だとわかっていた俺はふんっと言って飯をたいらげた。

飯も食い終わり、俺一人の優雅なひとときの始まり…なのだが。
只今、俺の部屋には奴がいるのだ。
「ねぇ、この続きまだ？」
そいつは俺のベットを占領し、さらに漫画まで押収してそんなことをぼやいているのだ。
「ねぇってばー」
横で何か言っているが。
まぁ無視だ。
なぜなら俺は今、戦場にいるのだから。
黒鉛という物質が白い薄い板にぶつけられ、それが線となって現れる。
戦況はまさに冷戦状態だ。

「ねぇ～　聞いてる？」
俺は口うるさい兵士に怒鳴りつける上官のように言った。
「うるさい！勉強中だ！」
そうなのである。
テストが近いのである。
むしろ受験生なのである。
勉強して当然なのだ。
それを邪魔するこいつがいけないのだ。
しかし、その瞬間冷たい空気が流れた。
「無駄よ…　明日から大変なことになるわ。勉強なんてやる暇なくなるんだから…」
「・・・」
なんて言うか、その意味ありげな一言に俺は恐怖感を覚えた。
「ど、どういうことだよ？」
俺は込み上げる恐怖感をなんとか押さえ付け聞いた。
「魔女達が降りてくるのよ…そして戦いが始まるの。」
彼女の表情を見るだけで鈍感な俺でもそれを理解できた。
「・・・」
俺は声も出なかった。
寒かった。
恐ろしかった。
「だからね！今日は楽しく過ごすの！」
そいつはこんなに恐ろしい状況にも笑って見せた。
こいつだって怖いのだろう。
なのにこんなに笑ってられるなんて、俺は自分が情けなくてしかたなかった。
「そうだな」
俺はゆっくりと微笑んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7403c/

空の郵便物

2010年10月24日14時23分発行